

ツヴィングリの^{つるぎ}剣
ーチューリッヒだよりー

奨励	石川 立（いしかわ・りつ）
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター所長 同志社大学神学部教授
研究テーマ	聖書の神学的・哲学的解釈、解釈学、教父学

次のことを指示するにあたって、わたしはあなたがたをほめるわけにはいきません。あなたがたの集まりが、良い結果よりは、むしろ悪い結果を招いているからです。まず第一に、あなたがたが教会で集まる際、お互いの間に仲間割れがあると聞いています。わたしもある程度そういうことがあるかと思います。あなたがたの間で、だれが適格者かはつきりするためには、仲間争いも避けられないかもしれません。それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです。なぜなら、食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。あなたがたには、飲んだり食べたりする家がないのですか。それとも、神の教会を見くびり、貧しい人々に恥をかかせようというのですか。わたしはあなたがたに何と言ったらよいのだろう。ほめることにしようか。この点については、ほめるわけにはいきません。

（コリントの信徒への手紙一 11章17ー22節）

「宗教改革の源流を訪ねて」

本日は水曜チャペル・アワーとしては今学期第一回目ですが、今回は学期の初めとはあまりかわりのない話をさせていただきます。私はこの2月下旬、学校の授業の一環として学生たちと一緒にスイスとドイツを訪れてきました。そのご報告をする機会がなかなかありませんので、この場をお借りしてその旅行の一端をご報告させていただきたく思います。

昨年度、神学部では「宗教改革の源流を訪ねて」という授業を立ち上げました。初めての試みです。春学期から秋学期にかけて教室の中でスイスとドイツの宗教改革について学び、この教室内の学びを終えた後、実際にスイスとドイツの宗教改革の源流の地を訪れるという授業です。はじめは水谷神学部長が中心となって立ち上げたのですが、先生が理事長職に就かれ、ご多忙を極めるようになりましたので、私が一人で、教室内の授業とその後のフィールド・トリップを進める役割を引き継ぐことになりました。皆さんにご協力いただき、事務処理なども含め、なんとか無事に、旅行を終えることができました。

教室内の授業では十数名の学生が出席していましたが、フィールド・トリップに参加した学生は10名でした。予算が限られていますので、残念ながら、10名に絞るほかありませんでした。旅行に参加した学生は、学部1年生から大学院の後期課程までで、学年の幅の広いグループでした。引率者は、私のほかに、同志社でドイツ語の講師をしている知り合いのスイス人、ドイツで学位をとったばかりの神学研究科出身者、そしてT Aの計4人でした。

宗教改革の源流の地と言いますと、まず、ルターが1517年に95箇条の提題を貼り出したと言われるドイツのヴィッテンベルク、そして、カルヴァンが神権政治を行ったスイスのジュネーヴが思い起こされます。今回のフィールド・トリップは、ヴィッテンベルクの方には行きましたが、スイスの西の端に位置するジュネーヴの方には行くことができませんでした。スイスは、ジュネーヴではなく、チューリッヒを中心に訪問しました。なぜ、ジュネーヴではなくチューリッヒなのでしょう。宗教改革の源流を訪ねるとすれば、この二つの都市のうち、チューリッヒを優先しないわけにはいきません。確かに、スイスの宗教改革の地と言えばジュネーヴがまず思い出されるのですが、実はそれより早く、スイスで宗教改革が始まったのはチューリッヒの方でした。

私たち14名は、2月19日に関空を出発し、フランクフルトを経由してその日のうちにチューリッヒに入り、当地のユースホテルに投宿しました。ここで4泊いたしました。到着日の翌20日に、チューリッヒの町を見て、その次の21日、22日はバスでスイスの町を巡りました。23日にドイツに移動し、ヴィッテンベルクの大学の、ロイコレアという施設に4泊しました。移動日の翌24日にヴィッテンベルクの町を見て、25日、26日はバスで、ルターゆかりの地を回りました。その後はハイドルベルクで1泊し、2月28日にフランクフルトを出発、3月1日に関空に帰着しました。

このフィールド・トリップについては、お話ししたいことがたくさんあるのですが、時間が限られていますので、今回はチューリッヒのことに絞って、しかも、その一端のみをお話しさせていただきます。

チューリッヒとツヴィングリ

さて、話を戻しますが、私たちはなぜ、スイスの宗教改革の地として有名なジュネーヴではなく、チューリッヒの方を選んで行ったのでしょうか。

私たちが宗教改革の地として最初に訪れたのがチューリッヒであったのは、同志社大学神学部とチューリッヒ大学神学部の間で、学術交流の協定が結ばれているからでもあります。しかし、それだけではなく、これも先ほど申しましたように、スイスの宗教改革はチューリッヒでまず起こったからです。チューリッヒの宗教改革の立役者はツヴィングリという人です。宗教改革について少しでも学んだことのある人は、ツヴィングリの名前をご存じかと思います。歴史的にとっても重要な人物です。しかし、ルターとカルヴァンの陰に隠れて、目立たない人であることもまた確かです。歴史を作った人物であるにもかかわらず、彼がなぜ目立たないかと言いますと、後で述べますように比較的早く亡くなったからだろうと思います。

ツヴィングリは1484年1月1日、スイス東部に位置するトッゲンブルクという地域の山のなか、ヴィルトハウスという場所で産声をあげました。ちなみにルターはその前年1483年11月10日に生まれましたので、二人の生まれた日は、2カ月足らずしか違いません。同じ歳と言えます。ヴィルトハウスのツヴィングリの生家と言いつた家には、500年以上経った今でもまだ残っており、私たちはバスに乗ってそこにも行ってきました。車がなければ行けない奥深い山のなかで、今では近くにスキー場があり、スキーを楽しんでいる人たちの姿が見えました。ツヴィングリは、ウィーン大学やバーゼル大学で学び、1506年の秋、カトリックの司祭になります。ドイツではルターが1517年10月31日に95箇条の提題を貼り出しますが、その翌年1518年の暮れも迫った頃に、ツヴィングリは司祭としてチューリッヒにやってきます。チューリッヒの大聖堂教会（グロース・ミュンスター教会）の説教者として招かれたのです。ところが、これに先立つ1516年に、ツヴィングリは、カトリック司祭にとどまりながらも、キリスト中心主義の考えに転向したと言われています。チューリッヒに来る前にすでに、ミサやサクラメントを大事にするよりも、キリストを中心とする信仰をもっていたのです。彼がこのような信仰をもった理由としては、1515年に従軍司祭としてイタリアに赴いたことが大きかったと考えられています。

当時のスイスのカトリック教会は、スイス人を兵隊として売る傭兵制によって利益を得ていました。ツヴィングリが従軍司祭として赴いたミラノの南15キロに位置するマリニャーノの戦場では、教皇庁とフランスとの間で激しい戦いが繰り返されました。そこで戦死し傷ついたのは、おびただしい数のスイス傭兵だったのです。同国人がこのような悲惨な死を遂げるのを目の当たりにしたツヴィングリは、司祭でありながらも、当時のスイスのカトリック教会の財政的基盤の一つである傭兵制に問題を感じないわけにはいかなかった。また、ルターの宗教改革のきっかけの一つとなった贖宥（しょくゆう）状（免罪符）の販売が、スイス国内でも行われていて、これに対しても彼は批判の目を向けていました。

当時のカトリック教会は腐敗していました。ツヴィングリとツヴィングリに続く者は、真実を覆い隠すものを一つ一つはぎ取って真実を見つけ出そうとするかのように、教会の中からあらゆるものを取り除いていきました。教会の飾り、聖画、オルガンさえも撤去しました。サクラメントも無くしていきます。七つあるカトリックの聖礼典は、聖餐式と洗礼だけに留まります。

このようにしてスイスの宗教改革は、他でもないチューリッヒで始まりました。彼が始めた改革は、彼の死後、チューリッヒのプリンガーに受け継がれ、さらには、ジュネーヴのカルヴァンに引き継がれていきます。

聖餐式の発生

私たち一行は、先ほど申しましたように、2月19日にチューリッヒに入り、翌20日にチューリッヒの町を見たのですが、このとき案内をしてくださったのは、チューリッヒ大学神学部の教会史の教授、オピッツ先生でした。宗教改革研究で世界の第一線に立っておられる先生です。知識に乏しい私たちが、この世界的な権威による直々のご案内をいただいたわけで、私たちのチューリッヒ市内巡りはこれ以上ない贅沢なものとなりました。

オピッツ先生には、ツヴィングリゆかりのグロース・ミュンスター教会などをご案内いただきました。天気は快晴で雲一つなく、陽が照りつけて2月のスイスとしては異常な暑さでした。その案内の途中、グロース・ミュンスター教会からリマト川（チューリッヒの町の真ん中を流れる川）に降りてきたあたりにある、ツヴィングリの像の前に私たちは立ちました。大きな像で、高さは数メートルほどもあります。大きな像ではありますが、建物の隣にあって目立たず、キリスト教に関心のない観光客ならば見向きもしないと思われる像でした。ツヴィングリは堂々と立ち、右手に聖書を携え、左手に剣（つるぎ）を下向きに持っていました（写真(1)）。

なぜ、ツヴィングリ像は聖書を持っているのでしょうか。これはお分かりですね。「聖書のみ」というのは、宗教改革の標語の一つです。

では、剣は何でしょうか。聖書に関係する者の絵や像で、剣を持っている人はパウロです。その図柄は、パウロがローマ郊外で首をはねられて殉教したと言われていることから誕生しました。ですから、ツヴィングリが剣を持っていることは、彼をパウロになぞらえる意図があったのだらうと思います。また、ツヴィングリの剣は象徴的には、彼がチューリッヒの町でカトリック教会と戦ったことを意味しています。しかしまた、実際にも、彼は自ら戦場に出て剣を持ちました。1531年、宗教改革を推し進めるチューリッヒは、南方15キロほどにあるカベルというところで、カトリック側のカントン（州）と戦いました。主任従軍牧師として、剣を携え武装して参戦したツヴィングリは、カベルの地で剣によって倒れまし

た。

ツヴィングリの像の前で、オピッツ先生はいろいろ説明をしてくださいました。その説明のなかで、印象に残ったことが二つあります。

一つは、ツヴィングリの像は威風堂々としているけれども、これは理想化されたものだということです。実際の彼の人生は傷だらけでした。チューリッヒ市当局との交渉で世俗的な面を露呈します。また、急進派に対しては保守的な態度を見せます。最後はみじめに戦死します。しかし、のちのチューリッヒ市民は、誇るべき宗教改革の町チューリッヒを建てた人物として彼を神話化しました。

もう一つは、聖餐式の話です。当時カトリックのミサでは、司祭は会衆に背を向け、キリストの聖体に変化したパンとぶどう酒を神への犠牲として捧げていました。ところがツヴィングリは、会衆の方を向いて聖餐式を行いました。司式者と会衆の間には食卓が置かれ、福音書の「最後の晩餐」の記述と同じように、キリストと会衆とが共に食卓を囲みます。カトリックのミサでは信徒に与えられなかったぶどう酒も会衆に与えられました。

実際の歴史では、1525年3月12日、大聖堂教会（グロース・ミュンスター教会）で最後のミサが行われました。翌13日に、最初のプロテスタントの聖餐式が行われました。宗教改革の風が嵐のように吹きぬけたそのころの時代は、歴史的な新しい出来事が日々起こるというめまぐるしい毎日でしたが、私としては、この3月13日が、スイス宗教改革にとって最も大切な日の一つなのではないかと思われました。

当時、カトリック司祭はミサのとき、会衆に背を向け、キリストを父なる神に捧げていましたが、新しい福音主義の教会では、牧師は会衆に向かい、会衆は主キリストと共に食卓を囲む—この点はカトリックの儀式を多く踏襲したルター派と違うところですが—まさにこのことが、1525年3月13日に、プロテスタントの礼拝のなかで儀式として確認されたのです。信徒を忘れた当時のカトリック教会に対して、福音主義の聖餐式は主キリストを中心とした交わりの時となりました。礼拝は神様との交わりの時であり、キリストを中心とした人びととの交わりの時になったのです。

この儀式は、神が私たちを憐れみ、人となり、貧しくなって、私たちの間に居てくださるという、神の愛のメッセージにほかなりません。

ツヴィングリの剣

宗教改革の標語には、「聖書のみ」と並んで「信仰のみ」という文言があります。

ツヴィングリの像は右手に聖書を携え、左手に剣を持っています。この剣の意味については、三つの意味があると述べました。一つは、伝統的に剣を持っているパウロになぞらえていること。一つは、カトリック教会と戦ったことの象徴。もう一つは、実際に剣を持って戦い、剣に倒れたことです。

しかし、この剣にはもう一つの意味があるのではないのでしょうか。それは、ツヴィングリの「信仰」を表していると思われるのです。彼が剣を持つ姿は、「信仰」というより、彼の信仰が「神の言葉」に依り頼んでこれを持っている姿、と言った方がいいかもしれません。

今日の聖書の箇所で、パウロは、貧しい人や、一般に適格者でないと考えられる人と共に主の晩餐を囲むことを強く勧めています。この箇所のパウロの言葉は、剣のように機能して人を叱り責めていますが、しかしその言葉の鋭さは、人を散らすためではなく、貧しい人や、一般に適格者でないと考えられる人と共に食卓を囲むためにほかなりません。

エフェソの信徒への手紙6章17節には「救いを兜（かぶと）としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい」とあります。ツヴィングリは新しい聖餐式で、会衆の方を向き、キリストを中心に会衆と共に食卓を囲んだとき、この霊の剣、すなわち神の言葉を信仰をもって携えていたに違いありません。

右手の聖書を読み、これに聞き、左手で神の言葉を、信仰をもってこの世に実行する、このことをツヴィングリの像は表しているのではないのでしょうか。

2014年4月9日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録

<HPでは写真等を省略しております。詳細は冊子体の『チャペル・アワー奨励集 292号』をご覧ください。>